

# 遺伝子バンク

30年

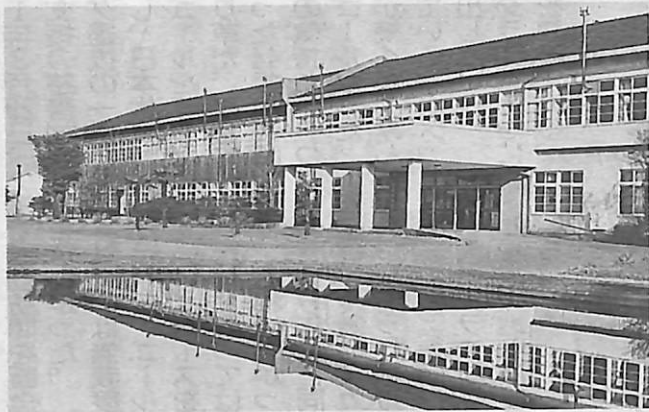
三島・国立遺伝研

2

国立遺伝学研究所（遺伝研）の一組織として設置されている日本DNAデータバンク（DDBJ）。遺伝研が三島市谷田に発足したのは、戦後間もない1949年秋のことだった。

現在では住宅街に囲まれ「近隣には「遺伝研坂下」というバス停や「遺伝坂」の名のついたマンションも見られる。市民には桜の名所として親しまれ、例年4月上旬の研究一般公開では、市花「ミシマザクラ」を生んだ約200種類の桜コレクションも楽しめる。発足当初、譲り受けた建

## 学閥離れゼロから出発



物には実験機等どころか水道もガスもなかったという。しばらくは坂の下の方で分けてもらった井戸水運び、空襲対策として窓に貼られた紙や床の泥を

洗い落とすのに明け暮れた。研究に欠かせない洋書や学術雑誌を発注しても入手できない時世で、初の客員教授となった桑田義備らから数百冊の寄贈を受け

たのは発足から1年以上後のことだった。

このようなゼロからの出発となる土地に、なぜ国立研究所を新設したのか。遺伝研の設置は、学閥から離れて研究に専念できるセンターを求めた遺伝学者たち

1949年に発足した遺伝研の本館

(55年撮影)

の執拗ともいえる運動の末に認められた。遺伝のメカニズムが徐々に明らかになりつつあった当時、農作物や家畜の品種改良への期待もあった。

国内を代表する遺伝学者らが政府やGHQの要人への交渉を重ね、栽培や飼育に適した温暖な候補地の中から、建物付きの土地として三島を選んだといわれる。首都圏と京阪神の間という立地も有利に働いた。

中島飛行機三島製作所の事務棟だった研究本館は、改築を経ても正面玄関のたすまいはそのまま残されている。

（伊東真知子・国立遺伝学研究所特任研究員）